

# ラオス南部サワンナケート県メコン河支流域における農民漁撈

辻 貴志

TSUJI Takashi

佐賀大学大学院農学研究科

**要旨** ラオスのメコン河流域では、農民による漁撈活動が盛んにおこなわれている。農民が漁撈活動に従事する理由として、農耕活動で不足する動物性タンパク源を補うほか、主要な生業である水田稲作で生産される米が世帯の成員を養うには不十分であることが考えられる。農民漁撈を理解することは、ラオスの農民の文化と、その生態に根ざした生き方を明らかにするうえで重要な課題である。本稿では、ラオス南部サワンナケート県のメコン河支流域に分布する少数民族ブー・タイの村で確認できる農民漁撈について、その成立要因を明らかにすることを目的とした。調査方法として、現地での参与観察と聞き取り調査をおこない、おもに漁法について記録した。結果、釣漁、罟漁、柴漬漁、網漁、採捕漁の5つの漁法が、川、水田、氾濫原、池といった生態環境を利用して展開されていることを明らかにした。そして、農民漁撈が、道具性、身体性、技能性、娯楽性から構成されていることを検討した。結論として、メコン河流域を生活の基盤とする農民は、漁撈の機会にめぐまれてきたことから、その豊富な魚類資源と漁撈に適した生態環境を利用することで、農民漁撈を発達させてきた可能性があることを指摘した。

**キーワード** 農民漁撈、ブー・タイ、メコン河、サワンナケート県、ラオス

## 1. 緒言

東南アジア大陸部のメコン河流域に位置するラオス南部では、その支流、水田、池、用水路、雨季の氾濫原といった生態環境においてさまざまな漁撈活動が展開されている。そこでは雨季と乾季の環境差が激しく、雨季には川が氾濫し、魚類が陸の水域に流れ込む。メコン河の魚類相は1,200種を超えることから (Food and Agriculture Organization of the United Nations 1996)、魚類の習性に合わせた多様な漁法が確認できる。魚類だけでなく、貝類、甲殻類、両生類がおもな漁獲対象である。爬虫類、昆虫類、藻類もえられ、人びとは多様な生物資源利用に従事している (Pedersen et al. 2014)。

ラオスの人びとは基本的に農民であるが、農耕活動の合間に、以上の水域環境を利用し、不足する動物性タンパク源を補うべく頻繁に「農民漁撈」<sup>1)</sup>に従事する。ラオスの農民は、とくに設置型の漁具を多く用い、身体や舟を利用した漁撈活動もおこなう。

ラオスの農民漁撈に関する先行研究は、漁具と水田漁撈の研究が際立つ。ゴードン・クラリッジらは、ラオスにおける漁具の分布と構造について、地域性と利用法に焦点をあて体系的に示し

ており、ラオスの水田および河川における主要な漁撈活動を理解するうえできわめて有益な資料を提供している (Claridge et al. 1997)。ダムロン・タヤニンとクリスティーナ・リンデルは、ラオス北部のカムの人びとが実践する狩猟技術とその物質文化について一貫して深く記載している。本書は、漁撈で使用される釜についてページを多く割いており、狩猟の一環として釜漁をとらえている点で興味深い (Tayanin and Lindell 1991)。

ラオスの水田漁撈については、本邦では秋道智彌が研究を先導してきた。その研究は、水田漁撈の季節性 (秋道ほか 2008)、地域住民を統合する社会的機能 (秋道・橋村 2007)、所有制度 (秋道 2007, 2010, 2013) に大きくまとめられる。これに関連して、筆者は、社会変容下のラオスの水田漁撈の生態学的側面に関する研究を展開してきた (辻 2013, 辻ほか 2013, 2018)。

以上の研究は、総じてラオスの漁具と漁法のユニークさ、生態環境と漁撈活動の関係についてとらえてきた。しかし、顕著な事例の提示にとどまっており、漁撈活動を体系的に考察していない。よって、漁撈活動に焦点を当てることは、ラオスの農民漁撈の理解にとって有益な作業である。本稿の事例は、ラオス南部の農村で確認できる農民漁撈のなかでも筆者が直接確認したものをとりあげる。そして、普通に確認できる農民漁撈から、メコン河流域の動物性タンパク源の獲得の仕方的一面を明らかにすることをこころみる。そうすることで、本研究は、メコン河流域の農民漁撈の特徴を理解することに資するであろう。農耕活動を基盤とする社会を漁撈活動が補填していることは、農民がいかにか所与の生態環境に適応してきたかを考えるうえでも重要な課題である。本稿では、メコン河流域の生態環境下で農耕活動と漁撈活動が相補的におこなわれるには、農民の漁撈活動への傾倒や漁獲される生物に対する執着が根底にあるとの仮説を立てた。以下、その仮説を検証するため、ラオス南部サワンナケート (サヴァナケット) 県の一農村の農民漁撈の事例をみていく。

## 2. 調査地と調査の概要

本稿についてのフィールドワークは、ラオス南部のサワンナケート県のL村でおこなった。サワンナケート県は、首都のビエンチャンから南に約500kmの距離にある (図1)。L村は、メコン河支流のB川に沿って位置する。

L村の住民は、少数民族プー・タイ (The Phu Tai) である。プー・タイは、言語学的にタイ・カダイ語族に属する。1999年時の人口は、約128,000人でラオス南部の数県に分布する (Schliesinger 2003)<sup>2)</sup>。村の世帯数は、筆者による2009年の調査時には約700であった。おもな生業は灌漑水田でのもち米栽培であり、人びとは農民であるが、漁撈活動、家畜飼養<sup>3)</sup>、機織り、狩猟採集、野菜・キノコ栽培、水産養殖を複合的に営んでいる。女性の生業である機織りと藍染が村の目立った文化的特徴であり、織物はラ



図1. 調査地の位置 (筆者作成)

オス国内で知れわたっている（牧2011）。隣国のタイに出稼ぎに出る人びとも少なくない<sup>4)</sup>。村では毎朝、朝市が催され、人びとは食料や日用品を頻繁に売買する。

ラオス南部の気象は、雨季と乾季にわかれ<sup>5)</sup>、雨季はおおよそ5月から9月、乾季は10月から4月に相当する（表1）。雨季には、B川 [写真1] の氾濫により生態環境が著しく変化し、多くの魚が、川、氾濫原、水田、池、用水路に流入する。人びとは、雨季になると、さまざまな漁具と漁法を用い漁撈活動に強く依存する。

現地調査は、2008年5月1日～18日、8月1日～17日、12月20日～2009年1月18日にかけて3回実施した。調査方法は、参与観察とインタビューである。おもに、人びとが従事する漁撈活動を観察し、それらに関するインタビューを実施したほか、漁獲対象魚種の同定作業をおこなった。調査言語にはラオス語を使用した。

本調査に関するラオス国内での調査許可は、調査当時に筆者が所属していた総合地球環境学研究所をととして、ラオス国立公衆衛生学研究所（現ラオス熱帯公衆衛生学研究所）から発給された。

	平均気温 (°C)		平均降雨量 (mm)	平均降雨日数
	最低	最高		
1月	14.9	29.3	3.7	1
2月	17.7	31.4	17.3	3
3月	21.3	33.8	31.9	3
4月	23.9	35.0	90.8	7
5月	24.6	33.3	168.3	14
6月	24.8	32.0	262.5	16
7月	24.2	31.3	219.0	18
8月	24.0	30.6	343.4	19
9月	23.5	31.1	219.0	14
10月	21.4	30.5	86.6	8
11月	17.6	28.8	6.8	2
12月	14.7	27.7	2.4	1

出処) World Weather Information Service (<http://www.worldweather.org>; 2022年5月28日アクセス)

表1. ラオス南部の平均気象



写真1. 雨季のB川の様子 (2008年5月10日, 筆者撮影)

### 3. 調査結果

#### 3-1. 調査地の漁撈活動

L村では、釣漁、罟漁、柴漬漁、網漁、採捕漁がおこなわれている。漁場として、川、水田、氾濫原、池が利用されていた。川や氾濫原での漁撈活動には、小型の木造舟が使用される。

漁撈活動は、5時から19時にかけておこなわれる（表2）。

罟と置針は午前にしかけ、午後回収する。投網と曳網はおもに午前、刺網を用いた漁はほぼ終日おこなわれていた。

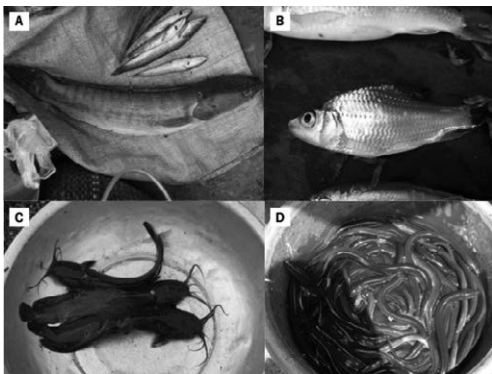
そのほか、確認できた漁法については、以下で記述する。

なお、漁撈活動で漁獲される魚は多種多様であり、本稿でそのすべてをとりあげることはでき

漁場	漁法	5時	6時	7時	8時	9時	10時	11時	12時	13時	14時	15時	16時	17時	18時	19時
水田	タウナギ筥 ( <i>toum eian</i> )	*	*												*	*
	置針 ( <i>bhet</i> )				*										*	
川	竿釣 ( <i>bhet</i> )											*				
	刺網 ( <i>mong</i> )			*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
	投網 ( <i>sum be</i> )			*	*								*			
	曳網 ( <i>gneng</i> )			*	*											*
	筥 ( <i>lop sikum</i> )		*	*										*	*	*
	筥 ( <i>lop</i> )		*	*										*	*	*

出処) 参与観察により筆者作成 (表内の\*は操業を確認したことを示す)。

表2. 調査地の漁法と操業時間帯の概要



A: ライギョの一種, B: コイ科の一種,  
C: ヒレナマズの一種, D: タウナギ

写真2. 調査地でよく捕獲される魚種  
(2008年8月3日・13日筆者撮影)



写真3. 置針で水田の魚を捕えた様子  
(2009年6月23日, 筆者撮影)

ない。よって、よく漁獲される魚種を挙げるにと  
ども [写真2], 筆者が朝市で確認した魚種30種に  
ついて Appendix に示した<sup>6)</sup>。その結果, コイ科  
(65%), ナマズ科 (10%), パンガシウス科 (7%),  
タイワンドジョウ科 (3%), キノポリウオ科 (3%),  
ギギ科 (3%), タウナギ科 (3%), ヒレナマズ科  
(3%), ナギナタナマズ科 (3%) で構成されること  
が明らかとなった<sup>7)</sup>。

### 3-2. 漁法の構成

#### 3-2-1. 釣漁

釣漁は, 置針 (*bhet*) が主流である。タケ片に針  
をつけた糸を結んだ置針を, 数十本用意しておく。  
農作業に出かける際, 水田にしかける。歩きなが  
ら, 順々に置針の柄を水田の畔に突き刺して設置  
し, ミミズをつけた針を水中に垂らしておく。そ  
して, 農作業の帰りに漁獲をびくに入れ回収する  
[写真3]。おもに, ライギョの仲間 (*pa kor*), キノ  
ポリウオ (*pa keng*), ヒレナマズの一種 (*pa dug*) と  
いった水田に棲息する魚種を狙う。釣竿 (*bhet*) を  
用いた釣漁も川で確認できたが, じゅうぶんに調  
べ切れていない。

#### 3-2-2. 筥漁

筥漁は, L村で頻繁におこなわれている漁法で  
ある (辻・広田 2021)。各家の軒先には, よく筥  
がかけられている [写真4]。筥の形態はさまざま  
であり, 対象魚種の習性や生態環境によって収斂し  
てきたと考えられる。大きく, 直立型籠筥 (open-



weave upright basket traps) と垂直筒型罟 (horizontal cylinder traps) に大別できる (Tsuji in press)<sup>8)</sup>。罟には「カエシ」がついたものも多く、生物が入り込むと罟から脱出が困難である。なかには「カエシ」のない罟もみられるが、これらは水流の力で生物が脱出しにくい仕組みである。小型の罟 (*toum*) は、タケやラタンを加工して製作する。ただし、今日、ラタンの資源量は大きく減少したことから、あまり用いられていない。近年では、利便性からプラスチック製罟が好まれるようになり、タケ製罟は減少しつつあるとの報告があるが (秋道ほか 2008)<sup>9)</sup>、調査地ではタケ製の罟が多く確認できた。小型の罟はおもに水田漁撈に使用される [写真5]。罟にはミミズを用いる。ライギョの仲間、キノボリウオ、タウナギ (*eian*)、ヒレナマズの一種、ギギの一種 (*pa kot*) のほか、カエル (*kop*)、カニ (*pou na*) も漁獲される。これらの罟は川でも用いられ、小魚やエビ (*kung*) が漁獲される。大型の罟 (*lop*) は木材を利用して製作されるが、材について同定できていない。大型の罟は川で使用する [写真6]。罟は用いず、川の流れを利用して魚を捕獲する。捕獲対象の魚種については網羅できていないが、そのおおよそはAppendixに記載した魚種である。罟を製作するのは男性であり [写真7]、女性は機織りに専念する。筆者は、タウナギ用罟 (*toum eian*) とカエル用罟 (*toum kop*)<sup>10)</sup>の製作について確認した。



写真4. 軒下につるされた罟 (2008年5月3日, 筆者撮影)



写真5. 水田にタウナギ用の罟をしかける男性 (2008年8月9日, 筆者撮影)



写真6. 大型の罟を舟に積み出漁する男性 (2008年5月12日, 筆者撮影)



写真7. タウナギ用の笊を製作する男性  
(2008年8月13日, 筆者撮影)



写真8. 川岸に並べられた柴漬漁用の大型の箕  
(2008年5月10日, 筆者撮影)



写真9. 四手網漁の様子 (2009年10月9日, 筆者撮影)

本稿では、えり漁 (*tone*) を笊漁に分類した。えりの捕魚部には笊が用いられ、えり漁は広義の笊漁である。水流の速い地点にえりを構築し、入り込んできた魚を笊で捕獲する。餌は用いない。また、同様の原理で、化学繊維製の網で製作された *lop sikum* も使われる。これは小エビを捕るのに用いる。

### 3-2-3. 柴漬漁

柴漬漁具 (*kha*) は、雨季になると川岸に並ぶ。竹製の大型の箕であり、なかに木(未同定)の枝をしきつめる[写真8]。これを川にしかけ、一定期間水中に沈めておく。小魚やエビを漁獲対象にする。ラオスの柴漬漁については、橋村(2008)に詳しい。

### 3-2-4. 網漁

網漁は、刺網 (*mong*)、投網 (*sum he*)、曳網 (*gneng*)、四手網 (*gadung*) が確認できた[写真9]。刺網は小魚をおもな漁獲対象とし、舟を用いておこなう。投網は、川岸から網を放つ。曳網は、雨季におこなわれ、小魚やエビを漁獲対象とする。四手網は、池で利用され、小魚を捕る。網漁は、笊漁、柴漬漁のように獲物を待って捕る漁法ではなく、網の操作に労力を要することから身体性が求められる漁法である。

### 3-2-5. 採捕漁

採捕漁も、川、池、氾濫原を利用して盛んにおこなわれる。採捕漁は、農民漁撈のなかでも日々の労働のつらさを軽減する娯楽性の強い漁法であると考えられる。

たとえば、ラオスでは、池の魚を捕る権利を入札で買い取る慣習がある。権利を落札した人びとが、池の魚を独占的に

捕ることが許される。池の魚を捕る際、人びとは池のそばでキャンプをする<sup>11)</sup>。そして、トラクターの動力を利用して、ポンプで池の水を抜く。池を干上がらせると、人びとはさで網 (*sawing*) やザルを持ち、池のなかの魚をかいぼりする。おもな漁獲は、ライギョの一種や小型のグラミーの一種 (*pa kadut*) である。小魚はその場で加工し、塩漬けにし、魚醤 (*pa daek*) にする。人びとは、日々の農作業から解放されたような感覚で採捕漁に興じる [写真10]。



写真10. 落札した池の水を抜き採捕漁に興じる人びと  
(2009年1月12日, 筆者撮影)

川では、子どもたちがよく水遊びをする。しかし、単に遊んでいるのではなく、川のシジミ (*hoi ki*) やタニシ (*hoi choup*) を集める。集められた貝類は、翌日の朝市で販売されることから、子どもたちは経済的に遊んでいると考えられる。

氾濫原では、舟を操り、スクミリングガイ (*hoi kong*) や水草 (シオグサであろう) を採集する。この水草 (*thao*) は、食用にするほか、販売する。

#### 4. 考察

以上、ラオス南部のサワンナケート県L村を事例に、メコン河支流域での漁撈活動について概観した。これらは、農民漁撈であり、農耕活動の合間の農民の生業である。

なぜ、農民が漁撈活動に従事するのか。ラオスでは、漁撈活動が経済的かつ栄養的に重要である。そして、人びとは豊富な水産資源に強く依存してきた (Baird et al. 1999; Interim Committee for Coordination of Investigations of the Lower Mekong Basin 1992)。

メコン河のめぐみが、漁撈に勤しむ農民を形作ってきた可能性がある。見方を変えれば、農民漁撈はメコン河流域において、家族の成員を支えるための米の生産が、年間をとおしてじゅうぶんでないことから比較的重要な位置づけにあるととらえられる (Santasombat 2011)。現時点ではその根拠となりうる定量的データを示すことは今後の課題とせざるをえないが、本調査の結果、ラオスのメコン河流域では、農耕活動だけでなく漁撈活動によっても農民のくらしが成り立ってきた蓋然性が高い。

L村では、釣漁、笠漁、柴漬漁、網漁、採捕漁の5種類の漁法が少なくとも確認できることを本稿は明らかにした。これらの漁法は、川、水田、池、氾濫原といった多様な生態環境で展開されている。このことは、農民が水域の生態環境についての知識を豊富に蓄積していることを想起させる。ラオスの魚は、河川に棲息し長距離を移動するコイ科やナマズ科などの「白い魚」、氾濫原や水たまりに棲息するタイワンドジョウ科、ヒレナマズ科、キノボリウオ科などの「黒い魚」、そして雨季に本流を出て氾濫原で産卵し、乾季に河川に戻る「灰色の魚」に区分されることから (秋道 2007, Akimichi 2008)、農民がこうした知識を有することは不思議ではない。

農民漁撈はまた、農民の創意工夫により実践されていると考えられる。それは、漁具と漁法、お



よび身体的かつ生態的技能の体系である可能性がある。ここで、本稿の結果をもとに、ラオスの農民漁撈の類型化をこころみてみたい(表3)。農民漁撈には、少なくとも、道具性、身体性、技能性、娯楽性の要素が埋め込まれていると筆者は考える。道具性とは、漁撈活動における道具の重要性であり、釣漁、釜漁、柴漬漁、網漁では道具が漁獲を左右する。いっぽうで、採捕漁はたいした道具を使用せず、道具性はほとんど介在しない。身体性とは、漁撈活動に要する身体を用いた行為であり、網漁と採捕漁では漁の遂行において身体的労力を要するが、そのほかの漁法では身体的労力は漁具の製作段階に費やされる。技能性<sup>12)</sup>とは、漁撈活動の知識や技術に裏打ちされた能力を指す。こうした能力が現地の人びとの漁撈活動に反映されているかどうかについては今後の検証が必要であり、筆者の調査において技能性と呼べるような鋭い知覚や技量は確認できなかった。娯楽性とは、日常の疲労やストレスをとまなう生業やできごとからの解放や逸脱を指す。農民の義務としての農耕活動に対して、漁撈活動は逸脱であるにとらえられるが、とくに池の権利を落札してまで魚を捕ろうとする思考や行動は現実逃避的な気分転換にほかならないだろう。

以上、ラオスの農民漁撈は、これらの要素によって構成されていると評価できる。ただし、ラオスをはじめ東南アジアの農村社会は、技術的、経済的、政治的なコンテキストから生じている変化によって急速に変容しつつあることから(Santasombat 2008)、農民漁撈の様子をくまなく把握することで農村社会の生活や環境の変遷をとらえていかななくてはならない。

	道具性	身体性	技能性	娯楽性
釣漁	○			
釜漁	○			
柴漬漁	○			
網漁	○	○		
採捕漁		○		○

出処) 参与観察により筆者作成。

表3. 農民漁撈の要素

## 5. 結語

本稿では、ラオスの農民が農耕活動をおこなうかわら、漁撈活動にも従事することを示した。しかし、農耕活動と漁撈活動という単純な図式ではなく、家畜飼養や狩猟採集をはじめさまざまな生業を組み込むことで生計をやりくりする生業複合のなかに、農民漁撈は位置づけられる。農民漁撈の比重は生業のなかでも無視できない割合を占める。

農民漁撈の発達要因として、農耕活動で不足する動物性タンパク源を補うほか、世帯人口を維持するために必要な米の生産性の不足が挙げられることは先述した。これらは農耕活動の側からのニーズである。しかし、ラオスの農民が水域での漁撈活動や資源利用に従事することは、民族誌事例をひもとけば珍しいことではない(Baird and Shoemaker 2008; Martin et al. 2013; Nonaka 2008, 野中編 2008)。本稿では民族誌事例の詳細には踏み込まないが、ここでは農民すなわち農耕活動というイメージを再考する必要があるのではないかという点を問題提起しておきたい。農民漁撈は、ラオス地域研究において、アブリオリにとらえられてきたのではなかろうか。農民であっても、さまざまな活動に従事することを本稿の事例は示唆した。それは、ラオスの農民の顕著な



特徴である。このことは、世界各地の漁民においてもあてはまる(網野 2009)<sup>13)</sup>。とくに、メコン河流域を生活の基盤とする農民は漁撈の機会にめぐまれ、豊富な魚類資源を利用し漁撈に適した生態環境を生きることで農民漁撈は育まれてきたといえよう。つまり、農の不足を漁の余剰で補う余剰の余地が、メコン河流域の農民に付与されていることで農民漁撈が発達してきた可能性がある」と本論は結論づけられる。

ラオスの農民漁撈に、農民の漁撈活動や漁獲される生物に対する強い傾倒や執着が根底にあるという仮説は包摂されるであろう。本稿ではラオス南部の一農村における農民漁撈の概略を報告したにすぎないことから、漁撈がどれだけラオスの農民の生計に寄与しているのか、そして文化の一部を占めているのか、体系的な側面についての研究を今後の調査で展開していく必要がある。農民漁撈は、農民にとって農耕活動からの一時の解放であり、非日常かつ遊びの要素が潜在していることにも留意しておきたい。しかし、本稿は事象を楽観的にとらえてきたが、現実には地方の貧困による資本、教育、インフラの不足が存在し(Santasombat 2003)、人びとを農民漁撈に押しとどめているだけである可能性もぬぐえない。

今後、本稿でなおざりとなった漁具の計測と製作技術、漁場利用、漁具と魚種の関係、漁獲の栄養的・経済的側面、ほかの民族誌との比較研究をはじめ、民具学、地理学、生態学、栄養学、民族誌学だけでなく多領域からのアプローチおよび共同研究が望まれる。そして、農民漁撈の文化・生態的意義について明らかにしていきたい。

以上、農民漁撈に対する知見を深めることは、メコン河流域のラオスの生態環境と資源利用と密接にからみあった農民の生き方を理解するうえでひとつの肝要な試金石であることを指摘し、本稿をしめくくすることとする。

## 謝辞

本研究は、総合地球環境学研究所「熱帯アジアの環境変化と感染症」プロジェクト(プロジェクトリーダー:門司和彦教授・現長崎大学多文化社会学部教授)により可能となった。本稿のデータは、現地の健康問題となっているタイ肝吸虫症の状況を調べるためのデモグラフィック・サーベイランス・システム(健康と人口動態追跡調査システム)を調査地で構築するための業務の合間に収集したものである。よって、トータルに農民漁撈をとらえるための集中的な調査はかなわなかったが、調査地で通常おこなわれている漁法についておおよそ報告できたと考ええる。ラオスでの貴重な調査の機会をあたえてくださった門司教授には、さまざまな面でご指導いただいた。調査地であるL村の人びとには、たいへんお世話になった。ラオス国立公衆衛生学研究所のスタッフの方がたにも調査に協力いただいた。本稿のデータは2008年から2009年にかけて収集したものであるが、筆者が体調をくずしたことにより公表が大幅に遅れてしまった。本誌により、本稿が日の目を見ることとなった。以上、記して感謝申しあげるしだいである。

## 注

- 1) 「農民漁撈」とは、日本民俗学者である高桑守史が提唱した「農民漁業」という用語にちなむ。高桑は漁民のなかでも網を用いる「農民漁業」の範疇にふくめ、突漁をおもにおこなう「漁民漁業」と対比させたが(高桑 1984)、本稿では農民が農耕活動の合間をぬっておこなう漁撈活動を農民漁撈と位置づけた。
- 2) 具体的には、プー・タイはおもに、ラオス南部のカムアン県、サワンナケート県、サラワン県に分布する(Schliesinger 2003)。
- 3) 村では、スイギュウ、ウシ、ヤギ、ブタ、ニワトリ、アヒルが飼養され、スイギュウとウシは毎日放牧され

- る。
- 4) ラオス語とタイ語の系統的な位置関係は近い。とくに、ラオス語とタイ東北部方言(イーサン)は国境を超えてほぼ等しい。村には、タイへの出稼ぎで建てられた立派な住居が確認でき、ほとんどの住居にタイのテレビ番組をみるためのパラボラアンテナが設置されている。
  - 5) L村では、雨季の前に雨乞いの祭りがおこなわれる。男性は、火薬を使い、空に向けて小さなロケットを飛ばすほか、竹筒に火薬をつめ爆発させ大きな音を立てる。女性は、集団で舞に興じる。
  - 6) なかには養殖魚がふくまれる可能性があることを指摘しておく。
  - 7) 朝市にはタイから運ばれてくる塩漬けのアジが多く確認できたが、Appendixから除外した。
  - 8) そのほか、サワンナケート県では、落とし蓋籠笥(drop-door basket traps)が用いられているが、L村では確認できなかった。
  - 9) ただし、素材としてナイロンやポリプロピレンはよく使われている。
  - 10) カエル用笥は *toum kop* のほか、*sai kop*、*ngep* がみられる。いずれもタケで製作される。
  - 11) 同様の事例は、鯪坂・池口(2008)にも記述されている。
  - 12) 本稿における技能性とは、篠原徹が提唱した「身体的技能」および「生態的技能」を指す。「身体的技能」とは、「景観の重なりを眼という身体で認知し記憶することであり、「生態的技能」とは「資源の生態や習性を知識として持つこと」である(篠原 2005)。
  - 13) 網野善彦によると、漁民は「百姓」に分類される。漁民は、海をおもなくらしの場として生きる人びとであり、漁撈のほかに、製塩、海上での交通や運搬、塩、魚貝、海藻の取引にみられる商業活動といった多様な活動を総合的に展開してきた人びとを指す(網野 2009)。

## 参考文献

### [日本語文献]

- 鯪坂哲郎・池口明子(2008)「魚類とサライの恵み—水域自然生物利用の多様性」野中健一編『ヴィエンチャン平野の暮らし—天水田村の多様な環境利用』東京、めこん、pp. 191-212.
- 秋道智彌(2007)「ラオス南部のルム漁(柴漬け式集魚装置)—共有池の中に個人所有の集魚装置を作ることの意味」中野孝教編『人と水3—特集・水と生業 水田の多面的生業利用』昭和堂、p. 8.
- 秋道智彌・池口明子・後藤明・橋村修(2008)「メコン河集水域の漁撈と季節変動」河野泰之編・秋道智彌監修『論集モンスーンアジアの生態史—地域と地球をつなぐ 第1巻 生業の生態史』東京、弘文堂、pp. 163-181.
- 秋道智彌(2010)『コモングの地球史—グローバル化時代の共有論に向けて』東京、岩波書店.
- 秋道智彌(2013)『漁撈の民族誌—東南アジアからオセアニアへ』京都、昭和堂.
- 秋道智彌・橋村修(2007)「水田漁撈」秋道智彌編『図録メコンの世界—歴史と生態』東京、弘文堂、pp. 42-43.
- 網野善彦(2009)『海民と日本社会』東京、新人物往来社.
- 牧喜代子(2011)『太陽と洪水が育んだラオスの木綿サワンナケートの布—手紡ぎ・自然染色・手織り木綿』京都、染色と生活社.
- 野中健一編(2008)『ヴィエンチャン平野の暮らし—天水田村の多様な環境利用』東京、めこん.
- 橋村修(2008)「メコンの柴漬漁」秋道智彌・黒田寿編『人と魚の自然誌—母なるメコン河に生きる』京都、世界思想社、pp. 69-86.
- 篠原徹(2005)『自然を生きる技術—暮らしの民俗自然誌』東京、吉川弘文館.
- 高桑守史(1984)「『農民漁業』と『海民漁業』—伝統的漁民の類型」『歴史公論』10(5): 48-54.
- 辻貴志(2013)「ユニークな水田漁撈—ラオスのルム・パ」『ピオストーリー』20: 76-78.
- 辻貴志・Joweria Nambooze・藤村美穂(2013)「ラオス南部の水田漁撈—*Loum pa*の構造と機能」『生態人類学会ニュースレター』18: 17-20.
- 辻貴志・Chanthaly Luangphaxay・藤村美穂(2018)「変容するラオス南部の水田漁撈—少数民族オイの事例」『日本熱帯生態学会ニューズレター』111: 12-16.
- 辻貴志・広田勲(2021)「ラオスの笥に関する物質文化的研究—日本民俗学との架橋に向けた一試論」『民俗文化』33: 217-230.

## [外国語文献]

- Akimichi, T. (2008) Changing Property Regimes in the Aquatic Environments of the Lower Mekong Basin in Southern Laos and Northern Thailand. *Tropics* 17 (4): 285-294.
- Baird, I., Inthaphaisy, V., Kisouvannalath, P., Phylavanh, B. and Mounsouphom, B. (1999) *The Fishes of Southern Lao*. Lao PDR: Lao Community Fisheries and Dolphin Protection Project, Ministry of Agriculture and Forestry.
- Baird, I. and Shoemaker, B. (2008) *People, Livelihoods, and Development in the Xekong River Basin, Laos*. Bangkok: White Lotus Press.
- Claridge, G., Sorangkhou, T. and Baird, I. (1997) *Community Fisheries in Lao PDR: A Survey of Techniques and Issues*. Bangkok: IUCN-The World Conservation Union.
- Interim Committee for Coordination of Investigations of the Lower Mekong Basin. (1992) *Fisheries in the Lower Mekong Basin: Review of the Fishery Sector in the Lower Mekong Basin*. Bangkok: Interim Committee for Coordination of Investigations of the Lower Mekong Basin.
- Martin, S., Lorenzen, K. and Bunnefeld, N. (2013) Fishing Farmers: Fishing, Livelihood Diversification and Poverty in Rural Laos. *Human Ecology* 41 (5): 737-747.
- Nonaka, K. (2008) Resource Use in Wetland and Paddy Field in Vientiane Plain, Lao PDR. *Tropics* 17 (4): 325-334.
- Pedersen, O., Chertchai, F., Chanthavang, A., Khamvang, X. and Yoysaykham, B. (2014) Aquatic Organisms in Rice-Based Ecosystems in Naxaithong, Paen and Pongmanh Villages, Phoukhout District, Xieng Khouang Province, Lao PDR. Halwart, M., Bartley, D., Bueno, P. and Innes-Taylor, N. (eds.). *Aquatic Biodiversity in Rice-Bases Ecosystems: Studies and Reports from Indonesia, Lao PDR and the Philippines*. Rome: Food and Agriculture Organization of the United Nations, pp. 21-43.
- Santasombat, Y. (2003) *Biodiversity, Local Knowledge and Sustainable Development*. Chiang Mai: Regional Center for Social Science and Sustainable Development, Faculty of Social Sciences, Chiang Mai University.
- Santasombat, Y. (2008) *Flexible Peasants: Reconceptualizing the Third World's Rural Types*. Chiang Mai: Chiang Mai University.
- Santasombat, Y. (2011) *The River of Life: Changing Ecosystems of the Mekong Region*. Chiang Mai: Mekong Press.
- Schliesinger, J. (2003) *Ethnic Group of Laos, vol.3: Profile of Austro-Thai-Speaking Peoples*. Bangkok: White Lotus Press.
- Tayanin, D. and Lindell, K. (1991) *Hunting and Fishing in a Kammu Village: Revisiting a Classic Study in Southeast Asian Ethnography*. Copenhagen: NIAS Press.
- Tsuji, T. (in press) An Eco-Material Culture Study on Fish Traps in Mekong Basin of Lao PDR. *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 47 (1).

## Appendix : 調査地で漁獲されたおもな魚種

	科	方言名 (学名)	頻度
1	タイワンドジョウ科	<i>pa kor</i> ( <i>Channa spp.</i> )	48 (20.6%)
2	タウナギ科	<i>eian</i> ( <i>Monopterus albus</i> )	20 (8.7%)
3	コイ科	<i>pa khao</i> ( <i>Puntius brevis</i> )	15 (6.5%)
4	ヒレナマズ科	<i>pa dug</i> ( <i>Clarias sp.</i> )	15 (6.5%)
5	ナギナタナマズ科	<i>pa tong</i> ( <i>Notopterus notopterus</i> )	14 (6.0%)
6	コイ科	<i>pa pak</i> ( <i>Barbonymus gonionotus</i> )	13 (5.6%)
7	コイ科	<i>pa sakang</i> ( <i>Puntioplites proctozyron</i> )	12 (5.2%)
8	キノボリウオ科	<i>pa keng</i> ( <i>Anabas testudineus</i> )	12 (5.2%)
9	コイ科	<i>pa eethai</i> ( <i>Osteochilus hasselti</i> )	9 (3.9%)
10	コイ科	<i>pa sood</i> ( <i>Hampala dispar</i> )	8 (3.5%)
11	ギギ科	<i>pa kot</i> ( <i>Hemibargrus filamentus</i> )	7 (3.0%)
12	ナマズ科	<i>pa kh'ao</i> ( <i>Wallago attu</i> )	6 (2.6%)

13	バンガシウス科	<i>pa yang</i> ( <i>Pangasius bocourti</i> )	6 (2.6%)
14	ナマズ科	<i>pa koeb</i> ( <i>Belodontichthys truncatus</i> )	6 (2.6%)
15	コイ科	<i>pa keeram</i> ( <i>Labiobarbus lineatus</i> )	5 (2.2%)
16	コイ科	<i>pa ta say</i> ( <i>Albulichthys albuloides</i> )	5 (2.2%)
17	コイ科	<i>pa langnam</i> (未同定)	4 (1.7%)
18	コイ科	<i>pa chin</i> (未同定)	4 (1.7%)
19	コイ科	<i>pa nai</i> ( <i>Cyprinus carpio</i> )	3 (1.3%)
20	コイ科	<i>pa nuanchan</i> ( <i>Cirrhinus cirrhosus</i> )	3 (1.3%)
21	ナマズ科	<i>pa nang</i> ( <i>Micronema micronemia</i> )	3 (1.3%)
22	コイ科	<i>pa kabok</i> (未同定)	2 (0.9%)
23	コイ科	<i>pa joke</i> ( <i>Cyclocheilichthys furcatus</i> )	2 (0.9%)
24	コイ科	<i>pa piya</i> ( <i>Morulus chrysophekadion</i> )	2 (0.9%)
25	コイ科	<i>pa kaeng</i> ( <i>Cirrhinus molitorella</i> )	2 (0.9%)
26	コイ科	<i>pa gamun</i> ( <i>Catlocarpio siamensis</i> )	2 (0.9%)
27	コイ科	<i>pa goom</i> ( <i>Thynnichthys thynnoides</i> )	2 (0.9%)
28	コイ科	<i>pa siew</i> ( <i>Rasbora sp.</i> )	1 (0.9%)
29	コイ科	<i>pa wen</i> (未同定)	1 (0.9%)
30	バンガシウス科	<i>pa yorn</i> ( <i>Pangasius macronema</i> )	1 (0.4%)
			<b>233 (100%)</b>

出処) 調査地の朝市に並んだ魚の頻度 (3日間の観察データに基づく。筆者作成)